

鳥取の専 手仕事

伝統の技と新たな挑戦 鳥取県の染色

[第4回]

伝統的な技術を用い、手作業で糸や布を染めることを生業とする「紺屋」。近年では、ほとんど見かけなくなりました。今回は、そんな中で江戸時代から代々続く老舗と、県外で修行し工房を営む伝統工芸士を紹介します。

見直される 伝統的なデザイン

鳥取県では、古くから麻や絹が、近世になってからは木綿が各地で染められていました。その名残で、今でも「紺屋町」などの地名があります。江戸時代までの染料は、草木、鉱物など天然のものでしたが、近代になると、化学染料や化学繊維が出現。染色方法も多様化し、作業は機械化されました。衣類は着物から洋服に変わり、伝統的な行事も少なくなっています。風呂敷などもあまり使われなくなり、伝統的な手仕事による染色は産業として成り立たなくなりました。



婚礼用の風呂敷

その一方で、大漁旗や風呂敷などの縁起の良い図柄などが若い世代に注目を集め、インテリアなどに使われるなど、見直される兆しもあります。古き良きデザインが、かつて新鮮に感じられるようです。

受け継がれる伝統の技 松田染物店(米子市)

米子市紺屋町、米子市商店街の二画にある松田染物店は創業から306年、江戸時代から藍染めの紺屋としてスタートし、明治初期より筒書きを始めました。「筒書き」は、渋紙(柿渋を塗った和紙の筒に、染めを防ぐ糊を入れ、筒の先から糊を絞り出して、布に模様を輪郭を描く伝統的な染色の技法です。



筒書き



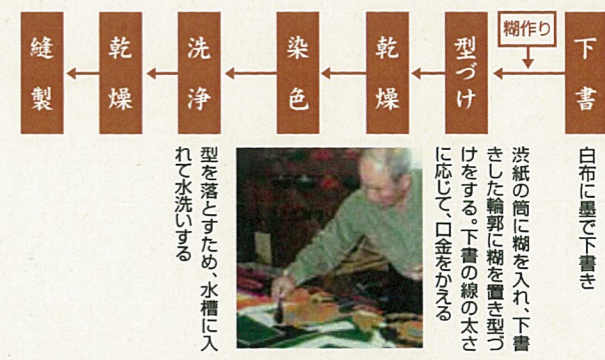
染色用の刷毛

道具のこと

筒書きに欠かせない渋紙でできた筒。和紙で出来ているので通気性がよく糊の状態をいい具合に保てるといいます。「糊も息をしていますからね」と松田さん。



筒書きの工程



伝統技術で今を染める 大山友禅染(伯耆町)

大山のふもと、伯耆町金屋谷に工房「手描染 アトリエカワハラ」があります。

経営者の川原栄次さんは大阪出身。大学卒業後、大阪の法律事務所勤務し、その後、京都で6年間染色、日本画などを学びました。そして昭和57年に妻のかなよさんの故郷岸本町(現伯耆町)に工房を設立し、染色活動を開始。平成3年からは、自らの染色活動に加えて、米子市内の高校で、染色の技術を教えています。

大山友禅染の製品は、着物帯はもちろん、Tシャツ、ストール、テールセンターなど幅広く、絵柄は繊細なものから大胆なものまで、とてもバラエティに富んでいます。



椿とすみれ模様の友禅染めの着物



友禅挿し

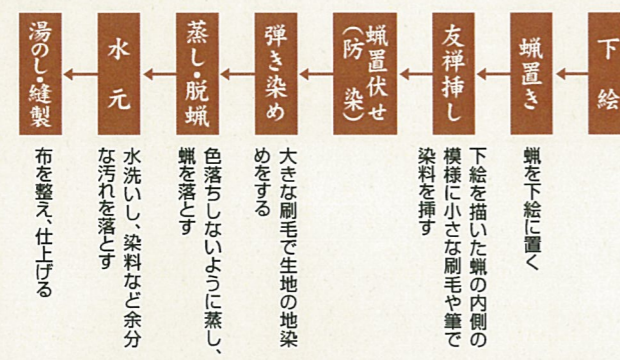
詳しくは...

- とりネット 「ととりの手仕事」(手仕事全般) <http://www.pref.tottori.lg.jp/teshigoto>
- 「ととりの工芸品」(伝統的工芸品) <http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=95598>
- パンフレット「鳥取の手仕事」(鳥取県市場開拓室発行)をご覧ください。

問合せ先 県庁観光政策課 電話 0857-26-7237

蠟燭染めの工程

「手描染 アトリエカワハラ」では、絹や綿の天然繊維の布に蠟燭染め、ぼかし染めなど様々な技法を用いて作品作りをしています。今回は、技法のひとつ「蠟燭染め」を紹介します。



美しい椿模様の友禅